

俳諧一葉集

後編

一



伊地知文庫
文庫20
355
6



芭蕉翁後句附合文集茶話俳句遺法消
息也一代之風藻雖不可忘于茲所謂親
於古書收藏於池庫此悉以舉焉

俳諧一葉集 前後篇九冊

東都中橋北植早
一具菴藏梓

俳諧一葉集紀行之部

伊地知氏書冊



古學庵佛号
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校



甲子紀行 又稱野
曝紀行

本屋中記立て流轉をも色以三更月二骨句入とひひん
むの人の杖うすううと貞享甲子秋八月江戸の破屋を
とむるは風の音もさるさるけり

秋十とを都て江戸をさす古
扉のうらむ雨の山をわたりかたむら

赤信千代の心も... 神楽に入るとも... 神楽の心も... 神楽の心も...

三十一... 神楽の心も... 神楽の心も...

神楽の心も... 神楽の心も...

神楽の心も... 神楽の心も...

神楽の心も... 神楽の心も...

長月のはじめ... 神楽の心も... 神楽の心も...

神楽の心も... 神楽の心も...

神楽の心も... 神楽の心も...

神楽の心も... 神楽の心も...

神楽の心も... 神楽の心も...

神楽の心も... 神楽の心も... 神楽の心も... 神楽の心も...

三

信物なくいく死にけし信の松

ひらき芳地のたぐいもかたじけなくも山深く白を
ゆきまきり松雨舎を埋る山嶽のたぐいしより山深く
く木を伐き東うのきき院の後のまじりの庭こもみ
昔より山より入るまじりこもみ人のたぐいし
あやうかたじけなくも山深くいんまじりあやう
ゆきまきり松雨舎を埋る

信物なくあやうまじりあやう

あやう人のまじりたぐい松の院よりたぐい方二丁とくまじり
あやうまじりあやうまじりあやうまじりあやう
あやうまじりあやうまじりあやうまじりあやう

あやうまじりあやうまじりあやう

あやうまじりあやうまじりあやう

あやうまじりあやうまじりあやう
あやうまじりあやうまじりあやう
あやうまじりあやうまじりあやう

あやうまじりあやうまじりあやう

あやうまじりあやうまじりあやう
あやうまじりあやうまじりあやう
あやうまじりあやうまじりあやう

あやうまじりあやうまじりあやう

不破

あやうまじりあやうまじりあやう

と山あふ年をうらむ

清輝了る岩乃余の餅林お田のこ

春の風をうらむその涙

まをれやうらむあふ山の影のうら

二月あふ花

水取下流の傍に昔の和

亭のうらむ三井林のうらむ山あふをうらむ

梅林

うらむ白きのみやうらむをうらむ

梅の本の花うらむうらむうらむ

伏見西岸古任口上人のうらむ

春のうらむ伏見の梅のうらむ

大はらむをうらむ

山はらむをうらむ

梅のうらむ

かうらむの梅をうらむ

梅のうらむをうらむ

梅のうらむをうらむ

吟行

梅のうらむをうらむ

水はらむをうらむ

命あふのうらむ

伊豆のうらむをうらむ

春のうらむをうらむ

ひまわりけれい

いづれもくし結まららんそま決

以炬香しきく急覺寺の大願の者さしむ月のけい
は化しぬまじりまじりや言の心地さしすにまじり
世角子一すつりり

梅香く卯の世をの玉あはるるれ

野杜玉

白けしと卯もく膝はかきしり

二つ山桐奈子つゆすゆりくさや身をまはらぬれ

牡丹葉深くまけぬ増はる我は

甲斐の山中のまじり

ゆく約れまきふくまむなうら

卯月の末夜すゆり結の芳とくす子けい

まき名いさるまじりみまき

唐島紀行

海の真室津の海は海はくはく

ねうけや 有らるる 船を

と云けん程文のむし... 月とん... ありけ... 船... 舟... 海... 甲斐...

或人の... 野... 山... 海...

と云... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

ぬくもくや石のおおりの昔のな
縁ありやがさうしくぬくまのな

宗波
曾良

田家

かろけけー田向の露や里の秋
秋向うに系やとぬれ里れ月
露の子や福すうけさ月をこら
芽の茎や有さの里れ焼さしけ

柳青
宗波
柳青

野

もくひもや一花すうれ秋ころも
秋の秋さすうひめく時了うさ
秋さや一花ハやとさ山のぐ
阿波自準のたす

曾良
柳青

秋をよまう干石の友さ
秋をこめうらぐわのさ
有るんとしひふのさ舟とる

柳江
柳青
曾良

貞享丁卯仲秋末五々

卯辰紀行 又稱芳野紀行

百族九竅の中子物りかろし名付く風雨切と云珠う
くすもの風子破とやすうふんた以ま和所んかお狂
自をぬいすくし終子生後めさうくしあす疾おれ
ゆく放擲きんて後おひゆめ射はすんて人かかんのを
かくし是非狗中をけりあさくおめお子あまの志はけ
あそまへて後おへんもいれお子あまの志はけ
そく更そくさくさん事を思ひて是くあまの志はけ
す能年氣くくは只一筋ははけりあまの志はけ
室帳のまきあけける雪舟の繪はけける利休の茶はけ
く雪はすくものハ一ありきくも風雨をけける造りまのい

く伊時を友とすんてあ花子ゆめをまきとけしおま
あまの志はけとまきとけしおまの志はけあまの志はけ
ひく心花子ゆめさる射はけけるあまの志はけ
く歎きとあれく造化とまきとけしおまの志はけ
邪骨月の初定まきとけしおまの志はけ
地く

旅人ともまの志はけとれん初くぐれ

すく山屋まきとけしおまの志はけ

足跡の位長左郎とまの志はけをけける女角亭おま
算送くまきとけしおまの志はけ

みく秋くしあまの志はけの志はけ

けりハ雪沾るくしおまの志はけをけけるあまの志はけ

とく四友親疎門人ホありハ待寄文章をもして信の成を
字難の料を色く表すと尺より外の三月の料をもめりむ
一芥の力を入り紙衣線子をもいふもの帽子志すハ信やハ
物心くに結つつし心く表すもの昔もいふあり心外
或ハ小舟もくくお妙に設けし者虎の海者いんき果
ゆく原を祝し多縁をも悟り外すらすマノ海あり人ハ
そ逢すくくも似つと心と物ありく是もまけれ
そもし是のり紙と之ものそ紀も長ぬ所佛の尼の文も
以情をも盡しこすし縁ハこれ伴似しついで世難物も
らくもくく心く表すしハ海者短才の子も及ん
ゆふのそりも向海屋よりたれくそんハ松ありが
ゆふの川ありれく心く表すもれく心く表すも

其も蘇新のちり心く表すハ心く表すハ心く表す
此風系心く表すハ心く表すハ心く表すハ心く表す
あり風系心く表すハ心く表すハ心く表すハ心く表す
先や世難ありつるが縁つもの伴信し心く表す
人の誰きすもく心く表すハ心く表すハ心く表す

鳴海とくわく

四葉の心く表すハ心く表すハ心く表す

飛鳥丹雅章の心く表すハ心く表すハ心く表す
みよこく心く表すハ心く表すハ心く表すハ心く表す
をいん心く表すハ心く表すハ心く表すハ心く表す

京や心く表すハ心く表すハ心く表す

みよけの心く表すハ心く表すハ心く表すハ心く表す

一のはしをたてて下への舟をゆき赤心道の橋をこし
 ぬきしつて所治をひきよめしとてまよへしと次大の海に九
 としつる号楚東南のふつたてりゆきや物まわりの人の
 又侍りふきしつてのちつひも思ひあきしとてかへり又しり
 ね方と山と海と田井の柳とを松林の村雨の古里といひ
 尾上つてき丹波の海かきよめしつて新保のそき運着ぬかき
 るしきとてのちつて新掛松より見らしつて一の谷内裡屋しき
 同のつてつてのちつて代のみよれを計のさきよめしつてつて
 うのつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 女心のゆきしつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 りつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 あつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

入地海にこめれつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 此れをよめつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 美つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

あけみく大根かきし秋の風
木石の縁うき世の人北ち度うき
遠くさのわらうけさる木石の秋

善光寺

月影や四門白雲も思ひこり
吹飛するを海百は世まゝの

たぐのわろき

月りを百代の過客こころゆふふ寺と又旅人多く舟の上
生涯とうとうのわろき老とあふものわろき旅こころ
旅をすこころとす古人もわろき旅をすこころとすわろき
寺よりわろきやの風をさるわろき源伯の心や月を後浪に
さすこころとす寺の秋は上北破屋の古寺をさるわろき
わろきまきまきとす夜の寺をさるわろき川の舟をさるわろき
物をつかて心をさるわろきとす祖神のまじりや手抄ひてわろき
まじりや手抄ひてわろきとす祖神のまじりや手抄ひてわろき
すこころとす祖神のまじりや手抄ひてわろきとす祖神のまじり
風をさるわろきとす祖神のまじりや手抄ひてわろきとす祖神のまじり

寺の戸も任ぢり代了ひあのか

向ハ方そ度の様子より置やふも書け七のゆりのたぶら
と一二月ハさかたしきふとさかたれるものなり不二のまじかす
うす尺さ上野宿中の花の梢さしいゆりなと心むそ一むり
まきかあうハ青うけけいひや舟子けりてさるま一ゆり
うさうし舟さあれハあまの里のさかたゆりささうさうゆり
さかに静家の涙をささく

ゆくまやうきやう魚は月をふりて

これと夫とけりてゆくまやうに人ハさ
中ささあふひてゆりけの尺ゆりささくささくささく
と一え福二ささうやう長さをゆりゆりささくささく
まきと呉人ハ白髪ゆりゆりささくささくささく
まきと月子尺ぬささくささくささくささくささく

まきとゆりけささくささくささくささくささく
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まきとゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

諸ふ中再無きふれく言ねやしく杉塚きしひやう石の
陽九奴やきう朝の砂けのまらぬをこやううゆるをゆま
志去のまらぬし神霊ゆしうまらうこらうをゆまの風
俗あれいし号を行神あやうを言ゆゆりかおのりゆら
面や又治三季お泉三郎家進とて五百季末の神今由
おやうういさうらう改ししかれハ勇義忠孝の士なり
徳高くとや玉ま志しんまをまらぬかまらぬ人よくそを
治る大義をもたす一志もまらぬこれうまらぬいさうら
うやうあう一舟をかりて松島うまらぬ其百二里餘松
島の役なりつゝ

そもくしうらうまらぬ松島を杖素第一の西風うまらぬ
同た西風を船を東南う海をへく江の中三里洲江の瀬

とくしうあまらぬのあまらぬ一松島のあまらぬゆまらぬ
はまらぬうまらぬうまらぬ二季うまらぬ三季うまらぬ
これ右うまらぬおらぬおらぬ抱るまらぬ火源あまらぬ松
のみまらぬやう枝葉ゆ風を吹抜ゆる風おのつゝたあ
いさうらう一其音も宵然と一美人の影もよらうゆまら
なやう神のおらぬ大山すまらぬまらぬまらぬ造化の夫工
ゆまらぬ人のまらぬまらぬゆまらぬ

松島の松ハ地はつきき海もむららぬ松居松砂のおまらぬ
松や松居を松やうまらぬ松の本うけのまらぬ一人まらぬ
まらぬ松やう松松松まらぬまらぬまらぬ松まらぬ
まらぬ松まらぬ松まらぬ松まらぬ松まらぬ松まらぬ
まらぬ松まらぬ松まらぬ松まらぬ松まらぬ松まらぬ

八月廿二日 本條志見者引ひ空冠と改まつて
 徳力と云ふものこそゆゑんこもき方と云ふの中へ氷を踏
 せしこへ八里更なる月行道のや寄入るこゆや
 息絶ふるえく頂上へ驍乳ハなほこ月ゆつて
 深き枕とてこゆを待たてて消れハゆふ
 岩のかたへに鎮治小舟とてこゆの取治雲水とてこ
 了るに際齊くこ剣をこゆに引ひ月と結ききりて
 吾も嘗てこゆの就泉と剣を海とてや干将莫耶れ
 吾もきこふそと地底の執持ふぬとてこゆを
 こけこゆに引ひゆと三尺とてこゆのけわこゆ
 こゆとてゆの降後こゆのこゆとてこゆを
 花のこゆとてゆの炎天の梅のこゆとてこゆを

日層を捲ハ風系一眼の中へ片々南とる海とてこゆを
 かけこゆとてこゆにゆつてゆつてゆつてゆつて
 も葉と秋田とかがふそとてこゆとてこゆとて
 雲とてはこゆとてこゆの取横一里けこゆ
 又とてゆつてこゆとてこゆとてこゆとて
 さとてこゆとてこゆとてこゆとてこゆとて

まさこゆとてゆつて西施、紗ふの花
 ゆとてこゆとてゆつてゆつてゆつて

巻記

多治や科理何と云ふ神とて
 みのこゆとて人
 佐耳

一 女中 遊女 女 ぬくく 萩 月

曾良とがれはせしむけりくろ海四十八ヶ瀬くろやぬく
ぬ川とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くく初秋の衣とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
候つとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
せむか一板の衣とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

卯の志山くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
大坂くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
一知くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
塚と勤け糸匠屋ハゆふのくくく

ゆふの夜よいさふくれ

秋すくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

色中全

ゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

小松くくくく

志保くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

此書左田の神社に清実善の甲斐のきれゆくくくくくくくく
属き一対義約とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

むんやれかふのらおまらうて

山中の温泉にゆくはきくねと森法師の足跡にたゆむ左の
山陽の親方米阿の祀山は空三十三所の開礼にさすまひて
存大慈大悲の徳をあらわす心で祈るにふけりしや
谷組の之をさうら侍にさうさるるしや古松松ありて
昔もさうのお寺岩の上を造らうけく珠徳のちけし

石山は石よりさうらー秋の風

温泉に侍る母のさうら次郎

山中や菊のさうらぬ湯のさうら

あしとすもの久米の助とて少きしかれ文徳徳を再
みほの良きさうらのむうに來りしは風流さうら
らさうはうの良徳の門人さうきさうら功名のはら

一村お河の料も清きさうら文かきかきとく米ぬ

曾良の娘も病む侍替米長も病むさうらゆらぬはさうら

ゆきさうらさうら秋の風

とさうらさうらのさうらにさうらさうらみ徳徳のさうら

さうらさうらさうらさうら

さうらさうらさうらさうら

大聖さの妹か令る寺さうらさうら伯の村か賀の地さうら

のねさうらさうら

秋の風 秋の風 さうら

とさうら一夜の福さうら同一さうら秋風をゆらさうら
山陽のさうらさうらさうらさうらさうらさうら
さうらさうらさうらさうらさうらさうら

停るも残照をうた陽のまじりかき柳ひまの折る庭中
柳られハ

庭掃るもや寺子らハ 柳

長砂のぬき片々子鞋ありて手控の杖赤の境吉原の入口
を舟棹きりて以越の松を尋ねぬ

ねすすろの松を 彼をよここをさし

ねをいふれもろの松 西行

此一そとし原系書くも一辨をわするものかき用の指
をさすも

九里の松寺の長老古く因りれハ若ぬ又産河の北枝
もの松神子尺送るは雲をさしまの松の風系こ
さすの松のけり折るゆえに松の化をわいぬ松を既

つるれりてのみ

物古く扇引さく時時つれ

五才下山入て永平寺を礼す是元禄沙の松寺し邦撰まほを
題すかこふは松を折るも貴なる松をさすや福井を
三里けりられハ飯志とめてゆくと松の松をさす
くは松哉と古く松寺の松の松をさすは松をさす
あぬ松とすも松をさすといふ松の松をさすや松をさす
くは松をさすも松をさすといふ松の松をさすは松をさす
きくに松をさすも松をさすといふ松の松をさすは松をさす
けぬ女の松をさすも松をさすといふ松の松をさすは松をさす
ア何しとて松をさすも松をさすといふ松の松をさすは松をさす

編子とさみぢうけのくしうらう捨をいもつをわたり若
堂のくろくろの羽折のまきまきい風子ひるくしうらうまき
ひ人のちえうらうめくしうらう

松の花のくろくろくしうらう木片の旅
しき人れ旅くしうらう木片の腕

海六とあつひうし決定すくしうらうしうらうれくしうらうしうらう
かきみくしうらうくしうらうしうらう

送信尊吟解

杖改り学難をくしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう
手やうらうはし信き武江の東海川の学難をくしうらう
既くしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう

越えきし斗鼓り脚の身もくしうらうしうらうしうらうしうらう
滑んとくしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう
手やうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう
中のまきしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう
うらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう
かのしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう
まきしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう
しうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう
しうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう

松の毛れくろくろくしうらうしうらうしうらうしうらう

既守賦

望月の跡無多はしうらうしうらうしうらうしうらうしうらう

鳥賦

一鳥小大ありて其を以て鳥鶴といひ大を以て鶴と
 といふは其の及哺の若くは懐くとも中の骨子とけり成ハ
 人たあゆむ人をもつけ記河の翅をあらく二星の蝶と
 なる哉大季のやうくをわけて喜ぶをさくくさるを何
 らともいふてくちまのあけりのあつさゆけり今わぬたへ
 ゆくたへて詩歌の才まを懐めりいひけり 信りてされ
 かりちをわすれ只余程の中いふ時いふは又は又は又は
 うさふつおれをいふ少くして実さ大し能中かめ骨たハ
 性倚強急ありて終の翅をあらくくちまのあけりて
 をおそれれ肉ハ骨の味もあくあつて骨のあつていひ

啼対を人不面の音を抱くくちまのあけりて悲を
 ちりふ里をゆりていふ骨の積をゆりて 同此のあつて同和
 を替へて終の骨のあつていひけり 信りてされ
 うみ也の翅をあらく人の骨をわすれ生るの終をあらく
 て終をいひてあつていひてあつていひてあつていひて
 ちりていひてあつていひてあつていひてあつていひて
 さるあつていひてあつていひてあつていひてあつていひて
 信りてされいひてあつていひてあつていひてあつていひて
 も甚くいひてあつていひてあつていひてあつていひて
 三足り今鳥のあつていひてあつていひてあつていひて

笠張祝

くうに... 大わら... 系れ...
くうに... 大わら... 系れ...
くうに... 大わら... 系れ...

銀河序

お陸そより脚... 横... かく... して... 一...
お陸そより脚... 横... かく... して... 一...

碧野の... かく... して... 一...
碧野の... かく... して... 一...

海や川

竹の紀行跋

竹... 海... 川...
竹... 海... 川...

一 歌 重 德 山 自 笑 梅 筈 山
 莫 懷 首 陽 餓 這 中 飯 穎 山

歌公のたふしをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 所りてあふしつこのいふこそ是をたみけりつて花
 入るあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 つとみけりてあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 夢院のいみじくも入つたあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 心ゆきつたあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 きしむあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 ましむあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 李白のあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり

まじりてあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 是一重とみけりてあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 物らつてあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり

梅七解

うらみこころをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 お月ききかみまのあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 とちんたれはあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 雅のあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 をうきかみまのあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり
 歌のあふれをうきかみまのあふれをうきつとみけり

千中ぬ水々林々予々住居一草葉の四柱をわく家波り
魚一し

わがし 浪小瑞河のひしすれ子

又云

余住くところ杖二丈くうにわ楓一本おきまふるを
こいこいささ

こゝ柳 多ふるをささく一ささく

鳥ささく又云

物寄のささくささくささくささく
か代わおきれ心り物あさく

廿三

ささくおハ木魂りゆささく月

文の板や木魂りゆささくささく
笋やおささくささく対北柱のすささみ
麦の穂や浪りささくささくささく
一々(麦ゆきささくささくささく)
能のりゆささくささくささく

廿四 題首林令

豆極る細々木極るささくささく 凡此

ささく及ささくささくささくささく
ささくささく凡此ささくささく
廿五 子那大徳ささく史邦丈草尺訪

題首林令

你對喙峰伴鳥魚 就荒森似野人居

枝既今欠赤虬印 青葉く既堪学書

石小督墳

強攬惡情出涼言 一輪秋月野村風

昔季保は取琴韻 何處孤墳竹樹中

茅軒しよるニ葉う茂る樹の家 文章

途中の吟

ほくまけふくや 枝も梅さくら 史邦

其山舎に感句

杜門覓句陳冬已 對空揮毫森如游

乙州来りて武江の嶽并智と分の細紙一巻世中

半俗の言肩入るを予とら後 貞角

白井峠をとりかきこ記

梅の葉より花の香 月

此分より俗人よりささる小至ひる

字取の山女より取をるをかりてわる

つらさるを先さゆさる 堪 忍

中の別をさるより 雷電電降を就るをさる 対電降

大さるはかり秘のよ ちいさるは葉のよ

廿六々

茅軒しよるニ葉をさける 枝の家 文章

ささけの葉よりささる 枝の家 芭蕉

柳生さるのよ けさるは角よりさ 古来

人のささるより 柳瓶からさる 文章

ささるより 三度飛脚よりさる 乙州

馬場海をけりて入る海
大崎やうしれたくとむの果
夕陽さうらう大井川舟をくくそ流しそくし戸籠
瀬の海は海をさそりたてぬ
三々北風の雨降つてくそ流し海止し尚武江のく
とて河内改千石ぬ

同日 舟をたてしりし子郎と流し川舟より海止りし
柿合をわんしそ流しをくくし北風さうらう一石も尺
めくして
さうらうやも流しぬ
野の流

修験大佛記

いふは不阿婆はたし新天御とてさうらうはたき改め新天下の野
宗上人の四法ありて 四里と年をくくして四友宗七宗無ひて
あつりさうらうの命 つかの流しをくく仁皇門権標の流しは
宗の流しをかくれそ相ものいそくすむん礎とくくすそ
いそくすむん礎とくくすむん礎とくくすむん礎とくくす
基柳子の坐すむん礎とくくすむん礎とくくすむん礎とくくす
宗宗のあつりたれそ宗の宗宗のあつりたれそ宗の宗宗のあつり
りそくすむん礎とくくすむん礎とくくすむん礎とくくす
宗宗のあつりたれそ宗の宗宗のあつりたれそ宗の宗宗のあつり
そ宗宗のあつりたれそ宗の宗宗のあつりたれそ宗の宗宗のあつり
そ宗宗のあつりたれそ宗の宗宗のあつりたれそ宗の宗宗のあつり

丈六子 助方 ちりし 石れ 上

習風信子節

風信のそよ風の 習子 柳の 浮き 瓜の 用ひ ちりし 柳を ちりし
け 天 兼の れん ちりし 柳の ちりし 高角 徹の ちりし 高角

白髪吟

ちりし ちりし ちりし ちりし 武陵 ちりし 古甲 ちりし ちりし 二十 ちりし
月 ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし

よ 海 ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし

ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし

果尋

代 ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし
ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし

古 ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし

卯月の中次次方の浦一尺より一尺の山に暮れゆく月
いづれに喜ぶるは秋の風吹くは秋の月を
ふとてや甲子物の月を暮れゆく月
ふとてや甲子物の月を暮れゆく月

更科姨捨月一編

一 姨捨の月一編。去きし月一尺の山に暮れゆく月十五みり
之を去くは去きし月一尺の山に暮れゆく月十五みり
ふとてや甲子物の月を暮れゆく月
ふとてや甲子物の月を暮れゆく月

いづれに喜ぶるは秋の風吹くは秋の月を
ふとてや甲子物の月を暮れゆく月
ふとてや甲子物の月を暮れゆく月

義をわくは秋の風吹くは秋の月を
ふとてや甲子物の月を暮れゆく月

去きし月一尺の山に暮れゆく月十五みり
去きし月一尺の山に暮れゆく月十五みり
去きし月一尺の山に暮れゆく月十五みり

すまひきりやわらわしは女もくはくも三十七

真偽不審と初

蝶舞

おののちうらめしのうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
け何のけはのあゆめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
け火鉢の茶かきうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし

まふれ家の音の梅の枝はさきよのいと歌いあはれ
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし

すまひきりやわらわしは女もくはくも三十七

松島

標下よりうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし
うらめしのうらめしうらめしのうらめしのうらめし

ふふて其海に樂天の詩をよみて支那のく木を
おぬすむ月を物に之を本物にうつきのゆかたを
ふふてそれの中にも雄然は海に舟をたふす
むむもそのまじりて風吹くこゝに三子者の志を
さかんやまゝこそおの友にすゝ人と味く洋くの
さしをまねてすて飲中八詠の歌をいふれや
は法外にまじりてつゝらぬ友をいふれや
やゝ思ひまじりてその夜に浮世のかれ風程を
米らふて友をいふれや

かくて三子の舞をよみておのの月を舟をうつ
このおの人の風情をよみておのの舟を舟に
ともも船に葉瓶のよる男ゆれは赤碓の舟のとも

ゆふとあつてさきかやちの海の名をいふ
そよかきつる風をいふれや
そよかきつる風をいふれや
そよかきつる風をいふれや
そよかきつる風をいふれや

舟月や海の名をいふれや

されば香部の風式船に石山子原の舟をいふ
居士の風情をいふれや
そよかきつる風をいふれや
そよかきつる風をいふれや
そよかきつる風をいふれや
そよかきつる風をいふれや
そよかきつる風をいふれや
そよかきつる風をいふれや

きつ子のおちびの純子のやをくち了了の舞のなつ了了と
うかんぬきの二人月々きのひよりやめらむ。陶朱子舟子
のそと五湖のゆきこさひ。一人の家の新さく物くせん
子。越女の江裾と花嫁の腰袋をこころし。いふぬき
ぬきん行く言の松を拂くさふさ。いやう上戸の去く
山よりをめぐりきりぬき。蕨のたふめりて。家と
おちびんものゆいひをたぬき。おちびんおちび
にちち小杯のうけかたれ。月寺の入す母みりれき
きしむるうし。

